

日本台湾学会第 17 回研究大会シンポジウム 「東日本大震災と台日交流—台南市と仙台市の青少年交流事業を例として」

沼崎 一郎
(第 17 回学術大会実行委員長)

本シンポジウムは、2012 年から 2015 年にかけて、3 年にわたって行われた仙台市の「台南市青少年訪問団事業」の成果を検証する目的で、仙台観光国際協会の協力の下、日本台湾学会会員のみならず、多数の一般市民の出席を得て開催された。参加した一般市民の多くは、青少年訪問団の団員として仙台市から台南市に派遣された大学生と高校生たちであった。

本シンポジウムは、第 17 回学術大会を仙台市の東北大学で開催する機会を捉え、台南市からは訪問団の受入れに尽力された奇美グループと南台科技大学から関係者を招き、仙台市からは訪問団参加者の出席を得て、それぞれの立場から報告を受け、台南市と仙台市とがどのように友好都市関係を築いてきたのか、震災を契機とした青少年訪問団派遣事業はどのような新しい交流を生み出しているのか、日本台湾学会会員とともに検証しようという試みとして企画された。

東日本大震災に際しては、台湾から日本に多大の援助が寄せられたことは周知の通りである。被災地である仙台にも、台湾から様々な支援が寄せられた。特に、共通の文化である「七夕」を縁として 2006 年に交流促進協定を締結した台南市では、「送愛到仙台（仙台に愛を送ろう）」の名の下に活発な募金活動が行われ、多大な寄付金が仙台市に寄せられた。

とりわけ、台南市に本社を置く奇美グループからは、被災地の復興を担う人材育成を目的として、3 年間で 300 人の青少年を台南に招待したいとの申し出があり、その資金援助を受けて、仙台市から高校生・大学生を台南市に派遣する「台南市青少年訪問団」事業が始まった。第 1 回の訪問団は、震災発生から 1 年に満たない 2012 年 2 月に派遣されている。そして、2015 年 3 月の第 9 回訪問団をもって、この事業は一応の区切りを迎えた。

この事業をきっかけとして、震災復興に留まらない新しい市民交流が台南市と仙台市の間に生まれつつある。仙台市出身の高校生が台湾の大学に進学する事例も出ている。また、訪問団のホスト役を務めた台湾学生の日本留学も増えている。そして、仙台市と台南市の若者たちの交流は、Facebook などのソーシャルメディアを通して継続しており、相互訪問も活発に行われている。したがって、この事業の経験は、今後の台湾と日本の市民交流のあり方に示唆するところ大であろう。

本シンポジウムのプログラムは下記の通りである。

1. 挨拶： 仙台市副市長 伊藤 敬幹
2. 主旨説明： 第 17 回学術大会実行委員長 沼崎 一郎（東北大学）
3. 報告： 台南市 陳 秋廷（奇美集団）中国語、通訳付
仙台市 須藤 伸子（仙台観光国際協会）
仙台市 平間 眞珠（第 1 回訪問団員、宮城教育大学 4 年）

仙台市 小田 創 (第9回訪問団員、仙台二高 卒業)
台南市 吳 柏霖 (学生サポーター、南台科技大学4年)
台南市 葉 蓁蓁 (南台科技大学)

4. コメンテーター：小松道彦 (交流協会)、林世英 (台北経済文化代表処教育組)
5. 全体討議
司 会 日本台湾学会理事 山口 守 (日本大学)

陳秋廷氏は、このプロジェクトの主要な目的が、日本の被災地から高校生・大学生を台湾に招き、台南市をじっくり観光し、古都の文化を深く堪能することで少しでも震災で傷ついた心を癒して欲しいということ、台湾の人々の熱意と思いやりを仙台に持ち帰ってもらうことで復興への長い道のりを歩むエネルギーを提供したいということ、そして台湾の大学で日本語を学ぶ学生たちにサポーターとして仙台からの訪問団のお伴とお世話をしてもらうことで台湾と日本の学生交流を深めたいということであったと中国語で報告した。また、陳氏とともに台南側主催者の中心的な役割を果たしてきた徐香華氏のビデオレターが紹介された。徐氏は、台湾側主催者と訪問団との間に生れた「感情」の絆を強調した。

須藤伸子氏は、送り出し側の主体となった仙台国際交流協会 (現仙台観光国際協会) が、震災後の業務多忙の中、台南市からの「希望のふるさと仙台」計画と題する青少年交流計画と多額の予算提供の提案を受け入れ、3年間で300名の青少年を派遣するという事業の実施に踏み切った経緯を報告した。実際には、9回にわたり、合計256名の大学生と高校生が派遣された。須藤氏自身も、2013年2月、第5回訪問団に同行し、初めて台湾を訪れている。

平間眞珠氏は、第1回訪問団 (大学生) の一員であった。被災地の様子を、支援してくれた台湾の人に直接伝えたいという思いで参加し、10泊11日の滞在期間中、台南市政府主催歓迎会、古跡見学、原住民の文化体験、烏山頭ダム見学、農村体験、ホームビジット等の様々なプログラムに参加し、台湾の文化や日本との結びつきを学び、台湾人の優しい人柄に触れて、台湾に対する想いも特別なものになったと報告した。団員にとって訪問団を通じて知り合った台湾の仲間たちは、今や訪問団参加者という枠組みを越えて、少し遠い場所に暮らす親戚のような存在だと熱く語った。平間氏は、2013年9月から1年間、新竹市の中華大学に交換留学している。

小田創氏は、最後の第9回訪問団 (高校生) の一員であった。実際に台湾を訪問し、台湾人の優しさと親日家の多さに驚くとともに、台湾の学生たちが世界を視野に入れて学習していて、日本に対する関心も高いのに対し、自分を含めた日本人の海外への興味関心の低さに危機感を覚えたので、今回の訪台で学んだことを、広く周囲の日本人に伝えたいと報告した。小田氏は、このプロジェクトに続く新しい交流プロジェクトの可能性を探る活動を始めている。

吳柏霖氏は、日本語を学ぶ大学生として、第5回から9回までの訪問団のサポーターを務め、訪問団の滞在中、旅行やイベントに同行し、生活を共にした体験を、ユーモラスに、確かな日本語で報告した。吳氏は、サポーターが、台湾側主催者と訪問団との間の仲介者として、通訳の他にも様々な調整に苦労しながらも、「国際交流」とは何かを深く考える機会を得たと話した。「台

湾に関心を持ってくれてありがとう」という彼の言葉は、会場全体を感動させるものであった。

葉藜蓁氏は、台南側主催者が義援金を台日文化交流に使うことを提案するに到った経緯、日本語を学ぶ学生たちを指導してサポーターを養成した体験、そして、訪問団員を受け入れる準備について報告した。とりわけ、台南市を中心とした古跡、グルメ、スポットのほかにも宗教、先住民や台湾文化の紹介を簡潔にまとめたガイド手帳の作成を手掛けながら、学生たちが台南滞在中のスケジュールを組み、訪れる予定の宿泊先や先住民の部落へ行き、村長や関係者とコンタクトを取るといった準備作業の体験談は、市民交流の裏方の労苦を伝えてあまりあるものであった。

交流協会の小松道彦氏と、台北経済文化代表処教育組の林世英氏からは、暖かい励ましのコメントをいただいた。

本シンポジウムは、日本台湾学会が広く自治体や一般市民と連携しつつ、台湾と日本との幅広い人的交流に寄与するための一つのきっかけになったのではないだろうか。また、新しい台湾と日本の市民交流の発展に、台湾研究者がどのように寄与することができるかについても、本シンポジウムは多くの示唆を与えるものとなったと信じている。

台南市青少年訪問団の具体的な活動内容については、仙台国際交流協会が編集・発行している報告書をご覧ください。第1回から第7回までの訪問団の報告書が、ウェブ上に掲載されている¹。また、同訪問団の民族誌的な記述と、その文化人類学的な分析については、後出の一條文佳・沼崎一郎論文をご参照いただきたい。

注

1 各報告書の URL は、以下の通りである：

- | | |
|-----------------|---|
| 第1回台南市青少年訪問団報告書 | http://www.sira.or.jp/japanese/activity/download/tainan_1.pdf |
| 第2回台南市青少年訪問団報告書 | http://www.sira.or.jp/japanese/activity/download/tainan_2.pdf |
| 第3回台南市青少年訪問団報告書 | http://www.sira.or.jp/japanese/activity/download/tainan_3.pdf |
| 第4回台南市青少年訪問団報告書 | http://www.sira.or.jp/japanese/activity/download/tainan_4.pdf |
| 第5回台南市青少年訪問団報告書 | http://www.sira.or.jp/japanese/activity/download/tainan_5.pdf |
| 第6回台南市青少年訪問団報告書 | http://www.sira.or.jp/japanese/activity/download/tainan_6.pdf |
| 第7回台南市青少年訪問団報告書 | http://www.sira.or.jp/japanese/activity/download/tainan_7.pdf |